

大学は人間力を高める尊い場所 中部大学でしかできない教育を目指す

文理融合の総合大学、中部大学（春日井市松本町）の石原修学長は、新しい時代の教育論を唱えている。学生はもちろん教員、職員も変化する社会の中で共に学んで人間力を高めていくことが大切と指摘。そして学生を「教えて育てる」のではなく、大学は学生、教職員の三者が高め合う尊い場所、と位置づけ、キャンパスへ丘を登つてくるとワクワクする、そんな空間にしたいと話す。石原学長の教育哲学に耳を傾けた。

——四月の学長就任時に教職員に伝えたことは。

石原 教員と職員は一体になって大学を考えてほしいと、これまでの教員総会をやめて、初めて合同の教職員総会を開き、話をしました。社会はどんな変化しています。台風のような渦の中で、変化をどうとらえるのか、教職員も変化から学び続けて、力強く情報を外に向けて発信していくことが

重要です。学生を教えて育てる、上から目線で古い知識を教えているのは本来の教育ではありません。学問の多様性、最先端の技術などを絶えず追究しながら教職員が人間力を高め、学生がそれを見て学ぶことに魅力を感じていく。学生、教職員の三者が学びながら人間力を高めていく尊い場所、それこそが大学と考えて、理解を求めました。

——中部大学の目指す方向は。
石原 まず、地域に根差した大学であること。中部大学は名前が示すように日本のセンターにあります。円を描くように見ていくと、一万一〇〇〇人の大学は人口が三十一万人の春日井市にあり、視野を広げれば、七〇〇万人の愛知県、二〇〇〇万人の中部地方と結びついていきます。そして一億三〇〇〇万人の日本から七四億人の世界へ打って出るのです。中部大学はこの場所、地域から世界に発信していくことが進路であり、渦を大きくしてグローバルを呑み込むような大学を目指しています。

目されていることは。
石原 本学は、三年前に五〇周年を迎えましたが、学園の創設はもっと前の一九三八年で、来年が八〇周年になります。建学の精神は「不言実行」「あてになる人間」です。創設時は名古屋が大きな一方で、経済的には不安定で、思想、言論、教育の自由が政府によつてコントロールされる中、私学でしかできない教育を目指し、長い時間を経て悲願の大学開学となりました。私学でこそその教育、最高学府を作りたいという強い思い、信念が現在の総合大学への発展に受け継がれてきたと思いますね。

——来年四月に開設を目指す宇

宙航空理工学科、二学科を統合した電気電子システム工学科がスタート。七学部二六学科の総合大学が新たな歴史を刻みます。人間力を高める学習環境は。

石原 初年次教育で全学共通の基礎教育をしていますし、この広いキャンパス全体が学びの場になっています。絵画、彫刻に加えて茶室もあり、人間力を高めていくための教育環境を整えています。五月には三〇cmと一五cmの二基の望遠鏡を備えた天文台観測所も開所し、学生の幅広い関心に応えていきたいですね。

時代の変化の中で教育改革は連

続して行われてきました。航空機産業は名古屋が拠点でしたが、戦争で失い、自動車が発展し、次に航空技術分野で世界に追いつこうとしているのが新学科につながり、社会的な要請に応えました。将来的には大学院にも結びつけていきたいですね。電気電子システムへの学科統一も電気と電子は基礎で共通部分があり、一つにすることで新たなものが生まれる可能性があると考えています。

——学生が地域活性化を考える「地（知）の拠点事業」にも取り組んでいます。

石原 学生は東海地方の出身者



石原 修（いしはら おさむ）
1948年11月、兵庫県川西市出身。72年、横浜国立大学工学部卒。77年、米国テネシー大学大学院電気工学専攻博士課程修了。85年、テキサステック大学准教授。89年同教授。99年、横浜国立大学教授。2014年、中部大学総合工学研究所教授。15年、中部大学副学長。17年4月から現職。工学博士。専門はプラズマ物理科学。

が多いのですが、志願者は全国に広がっています。学生がこの地域と連携し、地元の方々には中部大学を誇りに思っていたくことが前提です。その上でのグローバル化です。

——大学間競争激化の時代との見方も。学生気質と、受験生への情報発信は。

石原 物理学会を本学で開催したとき、本学学生はいさつがしつかりできて、礼儀正しく、人との接し方がよく、行動は積極的との評価を他大学からいただきました。親しみやすく積極的で、私自身もいい学生気質だと思っています。

競争というよりもこれまでとは違った本学の教育をどれだけ発信できるかが重要です。求人倍率、就職率も全国屈指ですが、知識偏重ではありません。人間力を高める、そのために仲間と一緒に学んでいける学生と教職員がともに成長していく、そんな本学独自の教育を発信していきたいですね。

——任期中の目標は。
石原 大学は教育と研究が柱で

すが、研究は相当先生方に引張っていただいていると思います。その研究力をこれまで以上に教育に生かしていきたいと考えています。大学院を強化して学生のレベルを広い範囲でさらに高めて、学生にはプロフェッショナルの研究の面白さを知り、未来産業にも進んでいってもらいたい。そして、本学の教育哲学を教育改革の大きな渦として日本中に浸透していけばいいですね。

——趣味、座右の銘を。

石原 結婚祝いにラケットをプレゼントされて妻と硬式テニスを始めました。海外生活では楽しむ時間がありませんでしたが、帰国してから時間が少なくなる一方です。自然の中を散策したり、こちらに来てからは、城を訪ねるウォーキングも始めました。「薫陶」という言葉が好きで自分の四人の子供にも書いています。香りが染み込むように学生が吸収していくことを考えると教育の基本でもあり、香りを出す自分も学び続けるという真摯な姿勢に通じると感じています。